

特集 I

新しい国際学部的一年目

2017年度の新規開講科目「多文化共生概論」を振り返って

田口卓臣

多文化共生概論は、2017年度から始まった国際学科の新カリキュラムの下、国際学部の専門科目を学ぶための導入科目として新設された。この科目では、国際学部に入学者が、大学における学修に必要な基礎的な能力・技術を身に付けるとともに、多文化共生に関する基本的な知識や論点を理解できるように、授業が進められていく。このため、国際学部の新生セミナーとの関連性が深く、原則として新生セミナーの担当教員が担当することになっている。

多文化共生概論は、全8回のオムニバス講義科目である。初期導入科目であるため、学生たちには特にレポートや試験を課していない。各回の授業の最後にコメントシートの提出を課し、出席、参加態度、コメントの内容などによって、合・否で単位を認定する。コメントシートの形式に関しては、各教員の創意工夫に委ねている。ただし、新入生たちが、授業のポイントを理解しているか、授業の内容についてどのような疑問を抱いているかを把握できるような形式にすることが条件である。なお、教科書は、宇都宮大学国際学部編『世界を見るための38講』（下野新聞新書）、および、宇都宮大学国際学部『卒業研究と進路のための履修ガイド』（平成29年度版）を用いる。

2017年度前期の担当教員は、田口卓臣、田巻松雄、高橋若菜、栗原俊輔、高山道代、立花有希の6人だった。第1回は授業全体のガイダン

スに使い、第2回から第7回までは各教員が1回ずつ講義を担当し、第8回は全授業を振り返る、という形をとった。

各教員は、それぞれの講義の中で、『世界を見るための38講』に寄稿した自らのエッセーの内容を解説し、自分がこれまで携わってきた研究と教育について学生たちに紹介し、それらの内容が国際学部にとってのキーワードである「共生」の問題とどのように関わっているのかを講義した（ただし、本年度は、諸事情により『世界を見るための38講』に寄稿できなかった教員が3人含まれていたため、その3人に関しては、自分の研究と教育に関わりのあるエッセーを同書から選び、それについて注釈しながら講義することとした）。学生たちにはあらかじめ読んでおくべきエッセーを指定し、彼らが事前課題をこなしているという前提に立って講義をおこなった。

また、新入生たちが国際学部のカリキュラムを理解するための一助として、『卒業研究と進路のための履修ガイド』に掲載されている見開きの教員紹介ページを示し、大学在学中の4年間を通じて、何を、なぜ、どのように学修していくのか、さらに、その教員の研究テーマと関連が深い授業科目群にはどのようなものがあるのかを紹介した。

それぞれの教員が講義した具体的な内容については、この後に続く教員自身の説明を参照してほしい。

さて、このオムニバス講義科目の全体に対する総括として、第8回目に当たる最終回の授業について振り返っておきたい。

最終回の授業では、新入生たち自身が、全7回の授業を通して考えたこと、疑問に思ったことを出しあい、お互いに共有しあう場とした。まず、同じ教員の新生セミナーを受講する学生同士で1つのグループを作り、それら6つのグループのなかで意見を出してもらった。次に、6グループの代表者たちから、それぞれのグループで出たコメントについて、全体に向けてフィードバックするように促した。最後に、彼らからのフィードバックに応答する形で、6人の教員全員がコメントを返し、授業の締め括りとした。

なお、合計で100名以上が参加する大規模な授業のため、それぞれのグループが教室のどの辺りに座るかを事前に決めておき、すぐにディスカッションに移れるように配慮したことも付記しておく。今後、この授業の取りまとめをおこなう責任教員は、この点にご注意いただきたい。

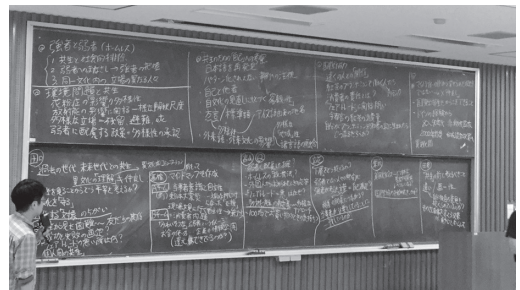
また、6グループからのフィードバックを踏まえ、それぞれの教員が的確に応答していくためには、それぞれのコメント内容を記録することが不可欠である。そこで、コメントに関しては、私がキーワード化する形で板書していった(写真数葉を参照)。

それぞれの教員の問題関心は多様であるため、それらに対する学生のコメントも、さらに教員からの応答自体も、内容を一義的に俯瞰することは容易ではない。ただし、全授業のテーマとして「共生」というキーワードを設けたので、一定の共通性は抽出されたと考えられる。実際、どのコメントの背後にも、学生か教員かを問わず、(1)どのような視点から「共生」を捉えるか、(2)「共生」の当事者は誰と誰なのか、(3)「共生」のための条件とは何か、(4)「共生」の精神と相容れないものはなにか、(5)そもそも「共生」は無条件に肯定されるべきなのか、といった原理的な問いか

けが控えていた。

貧困問題を語るにせよ、環境問題を語るにせよ、同一文化内の弱者をまなぐすにせよ、国際開発の対象としての途上国をまなぐすにせよ、あるいはまた、自文化の歴史的背景を自己認識するにせよ、そこには常にすでにみずからが所属する文化圏における「当事者性」の問題が付きまとう。

いったい、当事者とは誰だろうか?かかしくしかじかの当事者が成立するための条件とは何だろうか?そして、その条件を的確に捉えるための学問的な方法とはどのようなものなのか?当事者の幸福が高まるために必要な方策は何であり、逆にその幸福を妨げたり低減したりする要因は何なのか?こうした一連の問いかけを保持した上で、「共生」とは中長期的に見て、当事者の幸福を高めるのか、あるいは低めるのか?さらに言えば、「共生」に対する現代グローバル社会の厳しい批判を受け止めた上でなお、理念として語られるべき「共生」があるとするれば、それはどのように再定位されるのか?真剣に「(多文化)共生」を考えようとするなら、このような問いの連鎖を潜り抜ける作業は避けることができない。



第2回「共生する諸個人」を構想するための条件

田口卓臣

私の講義は、6回分の各教員の講義の導入にあっていた。そこでまず最初に、そもそも大学で学ぶとはどういうことか、国際学部が大事にしてきたマインドとは何か、さらに、今後少なくとも4年間に渡って国際学部生として学ぶにあたり、どのようなことを心がけてほしいかについて話すことから始めた。きわめて初歩的な内容ではあるものの、新入生たちにはかなり早い段階でこのような話をしておく必要がある、と私は考えている。

導入として話したことは、以下のとおりである。まず、全学生に田口ゼミの卒業論文を回覧できるようにし、自分の問題意識に基づいて、自分の立てた仮説を、人文社会系の方法を用いて検証し立証する、という卒業論文の主旨を説明した。一言で言えば、大学で学ぶとは、どんなことでも自分の頭と感性を用いて学問的に検証していくということに尽きている。学生たちにはそれがどのような意味を持つのかを説明した。

次に、国際学部が大事にしてきたものとして、複数の外国語を学ぶこと（多言語主義）、他者の文化を他者の視点そのものによって理解すること（異文化理解）、自文化中心主義を避けながら自分の足元を見つめること（自文化認識）、社会構造の縮図が現れる底辺を見つめ支えようとする（共生）などを挙げ、それぞれのマインドに関する批判的な認識をも含めて紹介した。

上に掲げた4つの要素は、国際学部生として自分の頭で考えるにあたり、少なくとも思考や着想の起点となるものと言えるだろう。ただし、それがお題目に終わらないためには、日頃から何らかのトピックを選んで、じっくりと複数の新聞に目を通し、国内外の政治、経済、社会、文化の動向を注視していく訓練が必須とな

る。とりわけ国際学部生であるなら、海外の新聞（英字新聞や第二外国語の新聞）にも注意を払うことが求められるだろう。この観点に立って、私が関心を寄せてきたフランスでは、『ル・モンド』、『リベラシオン』、『フィガロ』などなど多数の新聞が存在すること、それぞれの新聞の傾向や立場はかなり明確であることを説明し、今後4年間を通して、日本のメディアの諸傾向についても自分の頭と感性で検証していけるように促した。

以上の導入を経て、2017年度の多文化共生概論のテーマが「共生」であることを確認し、このテーマを語るなら避けて通れない入門書を紹介した。具体的には、アンドレア・センブリーニ『多文化主義とは何か』（白水社文庫クセジュ、2003年）、青木保『多文化世界』（岩波新書、2003年）、イヴァン・イリイチ『コンヴィヴィアリティのための道具』（ちくま学芸文庫、2015年）の3冊である。この3冊を選んだのは、文庫や新書という安価で入手しやすい形態だからである。もっとも、3冊とも「入門書」とは言いながら、必ずしも平易とは言い切れない。逆に言えば、日本にはいまだに「多文化共生」という概念に関するベーシックな概説書や入門書が存在していない、ということでもある。このことが、厳密な定義や、適切な学問的検証を経ずに「共生」というキーワードを振り回すだけの稚拙な風土を生んできた原因ともなっている。私はそのような風土に批判的なスタンスをとってきたので、学生たちにも上記の現状を説明した。（ただし、初期導入科目においてこうした学問的現状に切り込むことが適切だったのかどうか、という反省点は残る）。

なお「多文化共生」の問題を考える場合、良くも悪くも近代以降の世界のシステムを規定してきた「国民国家」という単位について考察することは避けられない。

例えばフランスでは、国民国家の構成員となる以上、フランスが「大革命」以降の歴史を通して追及してきた「一にして不可分の共和国」という理念を受け入れることが求められる（とされている）。つまり、平等で自由な諸個人は、この理念の名の下に「フランス国民」として統合される（と説明されるわけである）。しかし、シャルリ・エブド事件、パリ同時多発テロ事件などで露呈したのは、このような国民統合の枠組みから排除され、大都市郊外の貧困地区に集住を余儀なくされたエスニック・マイノリティーの存在であった。具体的には、アルジェリアを初めとするマグレブ3国の移民に出自を持ちながら、親世代とは異なってフランス語を母語とし、フランスの国民教育を受けながら、それでもフランス社会から様々な疎外感を味わってきた2世・3世の若者たちの存在である。彼らは、理念上は「フランス国民」として「統合」されているにもかかわらず、現実には人種的ステイグマや、貧困家庭、教育程度の低さなどの複合的な理由によって、社会的な排除を受け続けてきた。この事例において「多文化共生」、「社会的統合」、「社会的排除」といった諸概念はどのような問題をはらみ、どのような射程を有しているのだろうか？

上記の問いかけの切迫性と複雑性を説明するために、私は1990年代以降のフランスで大きな存在感を持つようになった政党「国民戦線（Le Front National）」を紹介した。一般に日本で多文化主義を掲げる学者たちには、この政党が掲げる「移民排斥主義」の主張を耳にした段階で、反射神経的に批判を始める者が多い。しかし、少しでもフランス社会の内側に身を置いたことがある者なら、「人種のるつぼ」と化したパリを初めとするフランス社会から「移民（出自の者）」を「排斥」するなど端的に不可能であることが即座に理解できるだろう。ではなぜ、それにもかかわらず、「国民戦線」は支

持されるのか？また、その支持にもかかわらず、なぜ、直近の大統領選では国民戦線の党首マリーヌ・ルペンが敗北したのか？このような問いの全体を通して初めて「共生」、「統合」、「排除」の諸問題を緻密に考察するための条件が整うことになる。もちろん、オムニバス講義の1回分では、その全体を学生たちに伝えることは不可能に近いので、本授業では、なぜ、どのような文脈において、「多文化共生」の精神が厳しい検証にさらされているのかを紹介するに留めた。

上記のような講義内容との関連で、「国民国家」の概念と歴史の中で「共生」を考えるにあたり、以下の文献を紹介した。すなわち、菊池和宏『社会（コンヴィヴィアリティ）のない国、日本 ドレフュス事件・大逆事件と荷風の悲嘆』（講談社選書メチエ、2015年）、ジャン・ボベロ『フランスにおける脱宗教性（ライシテ）の歴史』（白水社文庫クセジュ、2009年）、谷川稔『国民国家とナショナリズム』（山川出版社世界史リブレット、1999年）、早尾貴紀『国ってなんだろう？ あなたと考える「私と国」の関係』（平凡社、2016年）の4冊である。

最後に、上記の議論を踏まえて、「共生（コンヴィヴィアリティ）」について哲学的に定義した。その定義とはこうである。「コンヴィヴィアリティとは、平等な諸個人が、何者にも束縛されることなく、自らの意志によって共に生きることを選択できる社会の状態である」と。言うまでもなく、このような意味での「共生」が本当に可能なのだろうか、という問いが立てられなければならない。また、このような意味での「共生」も、必ず現実的にはシビアナ諸個人間の摩擦や葛藤を伴うものとなるだろう。そうである以上、それらの摩擦や葛藤をどのように暴発の未然で食い止めるのか、社会の

内側での「作法」や制度的な緩衝装置の構想が不可欠となるはずである。

その上で、私が『世界を見るための38講』に寄せたエッセー「哲学的に考えるとはどういうことか？」を参照し、そもそも価値観も嗜好も色とりどりに異なる諸個人が「平等」かつ「自由」に共生していくためには、どのような「思考」が必要なのか、ということを講義した。

第3回 多文化共生について考えるために

田巻松雄

「共生に向き合うための問題意識」を主に念頭に置いて、大きく3部構成として授業を行った。「予備知識」、「文部科学省の『グローバル人材』および国際学部のミッション再定義と改組」、「『弱者』と『強者』の共生をめぐる」の3部構成である。ちょっと欲張りすぎたかもしれない・・・

1 予備知識

予備知識としては、以前書いた文章を少し修正した文章をそれぞれ「音読」してもらった。自分もそうだが、音読する機会はほとんど無くなっているのではないか。当日、学生たちが黙読している間の静けさが嫌だなと感じ、急遽音読を思いついた。大学1年の夏休みだったか、実家に帰って古典を読んでいた時に、内容がとても難しく、わかってもわからなくともよいからとにかく読んでこうと音読し続けたことを思い出した。

ちなみに、その文章は以下のものである。

(1) 「共生」という語が、様々な文脈で広く使われている。多文化共生が最も多く使われていると思われるが、国際共生やグローバル共生といった使われ方もされている。ただ単に、何かと何かの共生と使われる場合もある。共生や多文化共生は非常に響きの良い言葉で、反論や否定を許さない。しかし、だからこそ、共生

という言葉の使われ方・使い方に注意をする必要がある。例えば、日本人と外国人の共生が語られるとき、それぞれに同等の課題が求められているのだろうか。「強者」と「弱者」の共生についてはどうか。「多文化共生の地域づくり」とか「共生社会の実現」といった響きのいい言葉が大きく叫ばれるなかで、大事な問題や課題が見過ごされていないか。

内閣府が行った『共生社会に関する基礎調査』というものがある。内閣府が(1)社会参加意識、社会貢献意識、(2)他者への関心、信頼、コミュニケーションの程度、(3)生活の安全や安心、ネットワークを調査項目にして、全国20歳以上の者を対象にして行った調査で、期間は2004年3月3日から3月21日までで、調査員による個別面接調査。標本数5,000人のうち有効回収数は3,470人で、有効回収率は69.4%であった。

「共生社会」という言葉を聞いたことがあるかという質問に対して、「言葉を聞いたこともあり、その意味も知っている」と答えたのは18.1%、「言葉を聞いたことはあるが、意味はよく分らない」が28.6%、「聞いたことがない」が53.3%であった。「言葉を聞いたこともあり、その意味も知っている」と答えた人に、「共生社会」において共生するのは何と何であるかを訪ねたところ、多い順に、「高齢者と若い世代」58.3%、「近所の人どうし」42.1%、「障害のある人とない人」37.5%、「自然環境と人間」29.4%、「子どもと大人」18.8%、「男性と女性」18.3%、「日本人と日本にいる外国人」12.9%、「仕事と家庭生活」10.8%（そのほかの項目は一桁）という回答結果であった。共生という語が様々な人間関係に関して意識されていること、言葉は知っているけれども漠然としたイメージしか持っていない人が少なくなかったことなどが伝わってくる。

この10年間で多文化共生という語があっとい

う間に全国に広がった。共生という用語が文化や民族概念に結び付けられるようになるのは、主に南米系ニューカマーの外国人が増加し始める1990年代に入ってからのことである。そして、1995年の阪神・淡路大震災で外国人支援を行った多文化共生センター（当時は外国人地震情報センター）の活動が広く知られるようになり、多文化共生という言葉も広く使われるようになる。そして、総務省が2006年に「多文化共生推進プラン」を発表すると、多くの自治体では「多文化共生の実現」が重要な政策課題と位置づけられるようになった。多文化共生とは、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的な違いを認め、対等な関係を築こうとしながら、共に生きていくこと」と捉えられる（総務省、2006年）。

2 ミッション再定義と改組

多文化共生概論は、平成29年度学部改組によって生まれた新規科目である。改組では、多文化共生に関する総合的な学びを学部教育の目標と位置づけ、多文化共生に関わる社会科学と人文科学が一体化した体系的な教育プログラムを構築すると共に、コミュニケーション能力や行動力・協働性等の実践的な能力を修得するための教育プログラム強化を目指した。本概論は最も基礎的・入門的な科目であり、何よりも多文化共生に対する学生たちの関心や意欲を大いに刺激することを大きな目的にしていると言える。

改組は、少し前のミッション再定義とつながっている。そして、文科省が「グローバル人材」の育成を高等教育の役割だとして声高く言い始め、国際学部としてどのように向き合うのかについて協議してきたことも深く関わっている。ところで、改組とかミッション再定義と言われても、大半の学生はピンと来ないであろう。自分は平成29年3月まで4年間学部長を務

めた関係で、ミッション再定義と改組の仕事に最も深く関わった。文科省との数度に及ぶやり取りも鮮明に覚えている。こういう話ができるのは自分しかいないと思い、この間の流れやエピソードをわかりやすく語った。大学を取りまく環境の理解に対して少しは参考になったかなと思う。

3 「弱者」と「強者」の関係—ホームレスもんだから

最後は、専門に引き付けて、「弱者」と「強者」の関係について課題提起的な話をした。多文化共生という言葉は、「多くの文化が共に生きるためには」というような問いかけとして捉えると、「文化」が前面に出てくる。しかし、多文化共生であれ共生であれ、問題は異文化の理解というレベルで終わらない。多文化共生も共生もすぐれて政治的な概念でもあり、社会や他者への一人ひとりの関わり方を正面から問いかける概念でもある。このようなメッセージを伝えたかった。

話は、ホームレス問題との出会い、「弱者」に対する社会の目、他者への想像力と共感、ホームレスの泪、の順でおおよそ進めた。「ホームレスの泪」は、『世界を見るための38講』に書いたエッセーのタイトルである。エッセーの最後は、「『野宿者の一滴の泪』は何を意味しているのだろうか。それは、何よりも、様々な事情で、社会の底辺的な立場に追い込まれた人々の悲しみであり、憤りであるだろう。しかし、それは、社会に抵抗する意思と明日への希望を示す泪であるに違いない」と締めくくった。

受講生の感想ではホームレスを取り上げたものが目立った。ホームレスは、この世は、どんなに努力しても駄目なときは駄目だし、たえず偶然にもあそばされるし、人の評価は理不尽であるし、世の中は思い通りにはいかない、こと

を最も切実に経験してきた人々であると感じる。普段は気にも留めない周辺の人々との共生という課題が突きつけられた驚きがホームレスの感想を多くさせた理由であったと言えよう。共生という言葉が持つ深さ、重さ、多様さの一端に触れてもらえたかと思っている。

第4回 環境と共生

高橋若菜

筆者の講義は全体の第4回目であり、受講生は、共生の概念や異文化理解等についての講義を一定程度聞き終えていた。そこで、自身の研究教育テーマである「環境」×「政治」を軸に、多様な共生について考えをめぐらすことを目指した。

環境問題は、科学技術により解決される事柄、との認識が、巷では一般的である。そのため、どのように「政治」や「共生」と接合するのか、不思議に思う学生が多いであろう。そうした前提にたち、環境リスクや対策に関する、個に埋め込まれた多様性を実感的に把握するところから始めた。具体的には、国民病とも言われる花粉症に関するオンラインアンケートを行った。「あなたは花粉症ですか？」からスタートし、症状、対策、原因、責任の所在、経済影響を含めた一連の質問を、学生に手持ちのスマートフォン等を使ってその場で回答してもらった。

アンケートの単純集計結果は、オンライン上で即時に確認できる。その画面をプロジェクトで映し出し、学生たちと共有した。ここで受講生たちは、花粉症の症状は多様であり、脆弱性には個体差があることを確認した。また原因についても、個人の体質説から森林政策原因説、大気汚染説、あるいはその複合要因にいたるまで多様であった。実際、原因や症状を説明するための「完全無欠の科学」は存在しない。さらには、花粉症をめぐる対策や、その費用負担、

経済的効果に関する認識についても多様であることも認識した。こうして、受講生たち自身が回答したアンケート結果から、個に埋め込まれた多様性を確認した上で、具体的な二事例へと進むこととした。

第一に取り上げたのは、『世界を見るための38講』第2章コラムの、福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクトである。東日本大震災に伴う福島原発事故は、1986年のチェルノブイリ原発事故と並ぶ、世界史級の環境複合災害と位置づけられる。ところで、環境問題の解決には、出来るだけ多くのアクターの声、とりわけ弱者の声が反映される必要があることは、すでに国際規範で確認されている（1992年 リオ宣言等）。また、科学的不確実性がある中では、環境問題への対応は予防原則に基づくべきことは、数々の環境災害からの教訓として得られており、やはり同様に国際規範化している。

しかしながら、福島原発事故後の放射線被ばくリスクに対して、この国際規範と逆行する動きがあった。日本社会で主流となったのは、完全無欠な科学論の適用であった。それにより、被ばくリスク基準は事故前より緩和された。そうした中で、リスクに脆弱とされる乳幼児・妊産婦を中心に、数多くの避難があった。避難は、避難指示があった地域からもなかった地域からもあったが、避難指示と賠償金はセットにされていた。そのために、放射性物質が少なからず沈着しながら避難指示区域外から避難した人々は、将来の健康不安を避けるために予防的観点に立ち避難したのだが、わがままであるとの誹りを受け、自責感に駆られ、経済的苦境に陥りながら、声をつぐむようになった。

こうした状況が引き起こされた政治的背景として、地方分権というより中央集権型であり、利益誘導型の政府＝産業界の結束が強いという、日本の政治・社会システムの有り様がひかえている。加えて、市民社会の政策提言能力や

政治的機会構造が弱く、受苦の表出が抑圧されがちであること、放射線被ばくリスクの回避が、「風評被害」「帰還促進」「復興」という複数の社会価値と衝突すると捉えられがちであり、対策の多様性が否定されている事実もある。何より根源的なことは、弱者に対する社会の目、すなわち他者への想像力・共感の欠如が横行していることが挙げられる。

以上の認識に基づき、今後何が必要であるかに考えをめぐらせた。まず、現行政策は極めて不十分であることを確認した上で、この問題を説く鍵として、多様性・共生の視点が重要であることを主張した。具体例として示したのは、新潟県における初期対応である。避難者を多数迎えた新潟県では、過去の災害対応経験を活かし、避難者の生の声にできるだけ耳を傾けた上で、賠償にとどまらない、様々な創発的支援を展開していた。そうした解決法及びその選択肢の提示が重要であり、可能であることを指摘した。次に、声を上げること、見える化し、記録を継承すること（すなわち受苦の表出）は、そうした解決策をみだす第一歩になることも指摘した。筆者らの調査からは、追いつめられる被災者に共感を寄せ、支えようとしている人は、一般に知られるよりはるかに多いことも明らかになっている。そうしたことを世に問い、記録を継承する努力を、今日も継続中であることを伝えた。

第二に取り上げたテーマは、家庭ごみの分別リサイクル行動である。筆者は、これまでに、複数国のごみ・リサイクル政策比較を行ってきた。そこから見てきたことは、日本における家庭ごみ処理は、世界では類をみないほど焼却率が高く、またリサイクル率は20%と低く留まっているということである。一方、『世界を見るための38講』第28講の「スウェーデンでみた二・六・二の法則」で取り上げたスウェーデンの家庭ごみリサイクル率は47%である。この

差異を説明するために、筆者がスウェーデンでの生活体験と日本との比較から着目したのが、分別のための仕組みであった。

ここまで説明した上で、再度、オンラインアンケートを行った。具体的には、ごみ集積所の形態、分別行動や理由を問うた。独り住まいの学生には、家族と住んでいる時との行動の違いについても聞いた。そうして得られた受講生のアンケート単純集計結果を、以前スウェーデンで行った類似のアンケート結果と並べて見せて、議論を喚起した。その結果、クラス（＝日本）では、決まりだからという理由で分別する人が多いが、スウェーデンでは、環境に良い、責任を感じる、との理由から分別行動をする人が多いという違いがみえた。また実家では、母親に分別排出行動の多くを頼り、一人暮らしになるとルールもあまり承知していないケースがあること等も見えてきた。これに比べて、スウェーデンでは、モラルのみに縛られないごみ分別促進施策があることを紹介した。たとえば、ペットボトルやビン缶については、経済的インセンティブを用いたデポジット制度の導入されている。また「家庭ゴミの分別は容易ではなくてはならない」という政策のもと、簡便に分別排出できる仕組みが備わってきている。子どもや、文字を知らない移民にも分かりやすい工夫がこらされている。ここに、多様性や共生の視点が組み込まれていることを確認した。こうして、環境や持続可能な発展の分野における、共生の効用について確認し、授業を締めくくった。

以上の講義内容について、授業後の学生アンケートでは、数々の意見が出された。いくつか、列挙しておこう。1) 花粉症対策をとっても批判される人はいないのに、原発震災のリスク軽減への行動を批判されるのは理不尽だ。環境問題への対策も、政治経済利害と密接に結びついている。2) 福島乳幼児妊産婦プロジェクト

トの話より、弱者の声を批判するのではなく、耳を傾けることが重要だと感じた。環境問題や原発事故も含め、他人への意識が低く、その意識を少しでも変えて、環境問題を解決するために共生の思想が重要。3) 原発事故による放射能汚染は、距離に比例しないこと知り驚いた。環境問題がビジネスとして利用され、経済の発展に貢献できるという発想に驚いた。知らないこと、誤解が、効果的な対応を妨げているケースが多いとわかった。固定観念を変えることが大事だ。4) 支援される人の中で、“支援されるままだけでいたくない”と考えている人が多い。環境に留まらず、共生の精神を持つ上で、このような考え方は重要だと感じた。筆者の講義が、多文化共生への入り口となったことを期待したい。

第5回 共生に向き合うための自文化理解

高山道代

「多文化共生」について考える際、他者の文化や社会に対する理解の重要性だけに目が向けられることが多く、自身の文化や社会に対する理解の重要性については見過ごされがちである。共生社会をめざす際に問題になることの多い、自文化が標準であって他者の文化はそこから外れたものとみなす態度（「自文化中心主義」）は平等性にもとづいた自他認識を阻害する要因となることが多い。他者の文化と同様に一定の距離をもって自文化をみつめなおす視点をもつことは、共生社会の実現に何かしらの内的な影響を与えるものと思われる。

「多文化共生概論」初年度にあたる本年度は、自文化の言語としての日本語が言語学一般においてどのような特徴をもつ言語として語られているのかについて紹介するとともに、具体的な言語現象の観察を通して日本語をみつめなおすこととした。

上記の問題意識に基づき、以下、本講義でとりあげた内容を概観する。日本語の言語上の特徴としては1) 膠着性、2) 母音調和、2) 開音節性の3点が指摘されることが多く、これらの特徴から他言語との類似性による位置づけが検討されてきた。以下、日本語における各特徴の現れかたについてとりあげる。

まず、一点目の特徴として膠着性についてとりあげる。従来から日本語は言語類型の観点からアルタイ諸語と関連付けて考えられてきた。これは、日本語が古代語から現代語に至るまで名詞の語形変化の手続きとして助辞の膠着というシステムをとり、この膠着性がアルタイ諸語の特徴とされるためである。また、二点目の、母音調和をもつという特徴についてもアルタイ諸語の特徴であるとされている。しかし、日本語において母音調和の現象がみとめられるのは古代語（奈良期）のみであり、現代日本語ではみとめられない。さらに、語彙体系や母音調和の現れ方において日本語と他のアルタイ諸語の間には相違点が多くみとめられることが指摘されており、両者の類似性についてはさらなる検討の必要があるように思われる。最後に、三つ目の特徴である開音節性についてであるが、この特徴は古代語から変化していない日本語の特徴といえる。英語などの閉音節言語と比較して、ほとんどの単語が一「ふね」(fune)、「うみ」(umi)のように一開音節によって構成される。開音節性はオーストロネシア語族に広くみとめられる特徴とされるが、日本語の場合、単語の語構成においてオーストロネシア諸語の言語と異なっており、類似性は低いとみられている。

上記のような他言語と日本語との類似性については従来からさまざまな検討がおこなわれてきたが、その結果、他言語との類似性による位置づけ（類型化）は現段階では困難であるとされている。一方、類型化の観点からは整理しに

くい個別の現象をむしろ積極的に注視し、各言語のもつシステムのありのままを記述しようとする動向もある。例えば、語形変化のシステムのありかたについてとりあげると、現代日本語の名詞の語形変化の手続きは先述したように単語に接辞 (affix) をつけることによる語形づくりを基本とする膠着システムをとる。しかし、動詞の語形変化は各単語の語尾 (ending) のとりかえによる語形づくりを基本とする屈折システムをとっており、名詞とは異なるシステムをとっている。

日本語の語形変化システム

1) 屈折による語形づくり

nom-u nom-o nom-e nom-i nom-eba

mi-ru mi-yo mi-ro mi-phi mi-reba

2) 膠着による語形づくり

yama: yama-ga yama-o yama-ni yama-e yama-to

boku: boku-ga boku-o boku-ni boku-e boku-to

このような語形づくりのシステムを言語ごとに観察してみると、中国語のように原則的に名詞も動詞も語形変化をしない言語もあれば、英語のように名詞においても動詞においても膠着システムと屈折システムの双方をとりいれて語形変化をする言語もあるといふように、各言語によって別個な方法がとられている。

最後に、「多文化」を考える際に見過ごされがちな問題として、〇〇語として一括りにされている個別の言語はそれぞれの内部に多様性を内包していることについても言及しておきたい。日本語は歴史的にみても他言語との言語接触によって外来語がつけられ、外来文化の影響を受け、「日本語」の内部にはすでに諸言語、諸文化の融合、多様な「地域」性が入り込んでいるといえる。また、現代日本語は「共通語」への画一化が進められる一方で、今なお多様な地域のことばがあり、多様な集団のことばがあり、年齢や立場などによる多様な使い分けがあ

る。このようにみえてくると、日本語の内部には、すでに、パターン化されえない多様性が含まれているといえる。このような、日本語の多様性への向き合いかたは「多文化」への向き合いかたを考えるうえでも示唆的である。

授業後の学生コメント

- ・日本語は固有の言語だと思われるが、実は様々な地域から海を超えてやってきたと知った。
- ・中国にも方言がたくさんある。たくさんの方言があるからこそ、文化もたくさんあるんだと思った。そのさまざまな文化を尊重して大切にしたいと思った。
- ・自分がどのような立場にあるのかを考えようともしていなかったことに気づいた。
- ・日本語は様々な文化を融合したうえで独自のものになっていったのではないかと。類型にあてはめるのは難しい。
- ・「自分とは何か」という問いは「他者とは何か」を考えることに繋がっている。
- ・自文化の中を細かくみると多文化ともいえるのだと学んだ。
- ・今日、共生の話聞いて、世界的に自文化中心主義に走っていて、共生から離れていっているなと思った。

第6回 日本・スリランカ 紅茶を通したつながり

栗原俊輔

多文化共生と世界のつながりというテーマのもと、日本とスリランカの紅茶を通したつながりを例に、私たちの消費生活が途上国の生産者に支えられていること、そしてその生産者の生活は必ずしも豊かではないことを伝えた。セイロンティーを生産している、スリランカの紅茶プランテーション農園に住む労働者コミュニティの人々と、そのセイロンティーを日々消

費している私たちはどのようにつながっているのか、現地の写真やスライドなどを見せながら進めた。

スリランカの紅茶プランテーション農園の人々と、私たち日本の紅茶消費者は、見えないところで深くつながっていることを、生産地であるスリランカの農園労働者も私たちもあまり意識していない。日本の紅茶はほぼ100パーセントが海外からの輸入である。その中でもスリランカ産のセイロンティーは毎年70パーセントを超える。すなわち、日本人は意識せずしてセイロンティーを飲んでいることになる。

加えて、宇都宮市は日本の中でも紅茶が飲まれている地域である。総務省による家計消費調査では、紅茶消費量で毎年上位に名を連ねる。そのため、私たち宇都宮大学、そして宇都宮の人々は、日本の中でもセイロンティーを多く飲んでいると言えるのではないだろうか。この点を講義の軸として、私たちの日常生活からは見えないところで、深く関わっている人々が海外に存在するという想像することで、私たちの価値観や世界観は大きく揺がれ、真の意味での多文化共生を理解できることになる。講義の冒頭で説明した。例えば、宇都宮大学の留学生の出身国でセイロンティーのような、日本がその多くを消費していたとしたら、そしてそのことを私たちが全く知らなければ、その留学生はどのように感じるのか？という疑問を投げかけた。スリランカからの留学生も本学に在籍しているが、日本人学生がセイロンティーの生産者の現状を知らずに、毎日紅茶飲料を飲んでいることをどう感じているのだろうか？と問いかけてから講義を始めた。

講義は、まずスリランカという国を理解してもらうことから始め、文化と歴史、そして2009年まで26年間続いたスリランカ内戦の話などを紹介。南アジアの優等生と言われるスリランカは、一人当たりGDPも南アジアで一番高く、識

字率等教育状況もトップである。しかし、スリランカにはプランテーション農園に居住するエステート・タミルと呼ばれる人々が存在し、しかも私たちとも深くつながりがあるということの説明。

また、自身の経験から、内戦時代の話も共有することによって、スリランカという国が、どんな文脈で紅茶を作り続けていたのかを具体的にイメージできるようにした。内戦や民族間の緊張という、日本では想像のつきにくい状況の中でも、紅茶農園の人々は、毎日淡々と茶葉を摘み、紅茶を生産していたということを強調した。

スリランカの紅茶産業のはじまりは、19世紀半ばのイギリス植民地時代にさかのぼる。イギリス植民地政府は、スリランカ（当時はセイロン）にまず内陸高原地帯にコーヒープランテーションを開拓し、その後、沿岸部などを中心にココナツや天然ゴムのプランテーションも開拓される。しかし、コーヒー農園では、コーヒー銹病が蔓延し、ほとんどのコーヒーが死滅、紅茶に植え替えられた。これが結果的にスリランカのプランテーション産業の発展に大きく貢献したことになる。冷涼で多湿な気候のスリランカ高原地帯は、紅茶栽培に適していたのである。その後現在まで150年にわたり、高品質な紅茶で世界的に有名なセイロンティーは、スリランカ経済をけん引する重要な外貨獲得のための産物であり続けている。

スリランカ経済には欠かせないセイロンティーであるが、現在も世界で第二位の輸出量を誇っている。前述のとおり、日本の紅茶の70パーセントもスリランカ産であり、紅茶飲料の多くもセイロンティーの茶葉を使用しているものが多い。私たちの意識しないところで、実は日ごろの生活に浸透しているスリランカ産のセイロンティーを生産している人々はどんな暮らしをしているのかを、講義の中心に据えた。

まず、日本の茶畑とスリランカの紅茶プランテーション農園の違いについて問いかけた。プランテーション制度は日本では馴染みがないため、学生の多くは高校時代に授業で名前を聞いた程度であった。そこで、栃木と言えばイチゴの産地ということで、イチゴ農家に例えて説明をした。もし、自分の家がイチゴ栽培に関わっていて、しかもそこには農園主が存在し、毎日イチゴ畑で働いている自分たち家族は、そのイチゴを食べたこともないとしたらどう思うか？自分たちの住む場所はイチゴ畑の中の、電気も無くガスも無い6畳二間程度の長屋に家族6人で住んでいるが、農園主は10部屋もある豪邸に住んでいるとしたら、どう感じるのか？そして、イチゴ畑の外の世界をほとんど見ることが無く、近隣の人たちとほとんど交流が無いとしたら、しかも言葉も違い、国籍も最近まで無かったとしたら、どんな生活なのだろうか、などと問いかけた。これらは、スリランカの紅茶プランテーション農園のエステート・タミル人の現在でも続いている暮らしである。

19世紀のイギリス植民地時代に、南インドから季節労働者として海を渡ってきたタミル人は、現在エステート・タミル人（農園タミル人）と呼ばれているが、彼らの生活は農園の外のスリランカ人よりも非常に貧しい。彼らは自分たちが摘んでいる紅茶がどこにいくらで売られているかも知らない。教育状況もスリランカの中で最も低く、高等教育を受けようにも、近隣には高校以上の教育機関が少ない上、町まで出ることも難しい。実質的に選択肢が限られている状況である。

しかし、もし外の世界を知ることがなければ、それが当たり前とと思っていたかもしれない。だが、世界的なITの発展やテレビ、ラジオなどにより、農園に居住するエステート・タミルの人々も外の世界を知っている。そんな中、外の世界を知ってしまったらどう思うかと学生

に問いかけたところ、今まで以上にストレスになるという答えがあった。では、戦前のように隔離すればよいのだろうか？市民を隔離することは、現代ではもちろんあり得ない。では、どうすべきか？

参考までに、茶摘みの女性たちの1日の賃金と、私たちの飲んでいる紅茶飲料の値段について説明をした。現在、紅茶農園の茶摘みの女性たちの賃金は、1日約320円程度である。一人の女性が1日に摘む茶葉は約10キロである。その10キロの茶葉で生産される紅茶は2～3キロである。一方、日本で飲まれている紅茶飲料（500ml、140円）には平均で1～2グラムの紅茶が使われている。すなわち、紅茶農園の女性が1日で摘む茶葉10キロで、2,000～3,000本の紅茶飲料が作られる計算になる。1本が140円として計算すると、28万円～42万円の売り上げになる。農園労働者は通常1か月に20日～25日働くので、25日間働いたとすると、1か月で700万円～1,000万円分の紅茶飲料の売り上げに匹敵する茶葉を摘んでいることになる。しかし、農園労働者の賃金は320円であるので、25日働いたとしても、約8,000円にしかならない。

最後に、このような状況に置かれているセイロンティーを生産している人々と、それを飲んでいる私たちのつながりは、どのように見るべきなのかと問いかけた。紅茶プランテーション農園に住んでいる、エステート・タミル人の生活と労働環境に対して、私たちには消費者としての責任があるのだろうか、という問いに関して、学生からの授業コメントシートには、様々な意見が寄せられた。一番多かったのは「分からない」または「責任はあると思うが何に対して責任があるのか分からない」や「責任はあるが何をしたいのか分からない」などである。

150年およぶ生産制度と世界的流通システムに組み込まれている状況を一晩で変えることは

できない。そのような状況下で私たちは何ができるのか、何を知るべきなのか、紅茶という飲料だけでも、このように日ごろは見えていない世界が広がり、想像力を持つことが大切であると伝え、講義を終えた。

第7回 理念として／実践として「多文化共生」を考える

立花有希

本授業は、1) 「多文化共生」について、2) 38講を題材にして、3) ドイツの経験から、という3部構成で行った。以下、それぞれについて、具体的な内容を振り返ってみたい。

1) 「多文化共生」について

それまでの6回の講義で受講生たちは「多文化共生」という語を中心にした考察を経験し、おそらくは自らもその語を使うようになってきているところで、一度立ち止まって省察してもらうための問題提起として、「多文化共生」に対する批判を取り上げた。もちろん多文化共生を批判する人はいない。批判があるのは、多文化共生の語られ方、扱われ方、議論の進められ方に対してである。

学生からの反響が大きかったのは、「結局、共生とは『仲良くしましょう』の言い換えに止まってしまう現実」（馬淵仁）という指摘で、受講生からは「自分とは違うルーツや文化をただ受け入れ、侵害せず、批判しないのが『共生』なのか、ただ仲良しになるというだけではない『共生』とは何なのか、ということを考えなければならないと思う」「共生といっても、どうすることが共生することなのか具体的にわかっていないから『仲良くしましょう』で止まってしまうのだと思った」といったコメントが寄せられた。コメントシートに直接の言及は見られなかったものの、「外国人問題や多文化共生自体が、日本ではすぐれて階級的かつ人種

的な意味合い濃厚である」（佐久間孝正）、「権利面での不平等を認識することなく、『お互いの文化を尊重しあって共に生きる』社会を作ろうというのは独善である」（戴英華）といった批判もその意味するところの説明を含めて紹介したので、先に引用したコメントやその他の感想は、そうした複数の主張から得られた示唆も考え合わせて綴られた意見であるかと思われる。

2) 38講を題材にして

本書の執筆者ではないため、田巻先生のコラム「HANDSプロジェクト」（p.38-40）を事前課題とした。冒頭、予習確認テストとして次の2問のクイズを出した。

Q1. 宇都宮大学国際学部で取り組まれてきた外国人児童生徒支援のための活動の通称は、○○○○プロジェクト

Q2. 1990年代に急増した外国人労働者の多くは、○○○○や○○○からの○○○○○であった。

A1.はコラムのタイトル通り「HANDSプロジェクト」であり、大文字小文字の別などを問わなければさすがにほぼ全員が正解したものの、A2.「ブラジルやペルーからの日系南米人であった」に対しては、「アフリカやインドからの不法労働者」、「ネパールやコンゴからのホームレス」など誤答珍答が続出し、正答者は8人だった。これは他の講義科目でも経験することだが、事前リーディング課題に文字通り「目を通した」だけという学生が少なくない。字面だけ追っても読んだことにはならない。少なくとも、その文章が何について書かれたもので、そこからどのような情報や主張を得たかについて、自分のことばで整理できるくらいには読み込んでほしい。背景知識があり、関心の高い内容であれば、「目を通す」だけでもそれが叶うかも知れないが、繰り返し読んだり、場合

によっては他の文献などから調べたりしなければそれができない場合もあるはずである。少し話がずれてしまったけれど、大学での学びを始めたばかりの受講生を対象とするこの科目では今後も伝えていくべきメッセージであるように思われたので一言ふれてみた。

さて、本題のHANDSプロジェクトでの活動については、テレビの取材映像などを活用しながら説明し、研究・教育・社会貢献という3つの役割が求められる現代日本の大学の一つとして宇都宮大学を捉える機会とした。HANDSプロジェクトを通して大学だからできること、大学にしかできないことを模索していると伝えたところ、いつになく気持ちが高揚してきて、学生（さらに言うなら宇大生、国際学部生）だからできること、学生にしかできないことに挑戦してほしいと熱いメッセージを送っている自分に驚かされたが、HANDSの学生ボランティア派遣事業に挑戦してみたいとコメントシートに寄せてくれた学生が、翌週にも派遣先を見つけて外国人児童の学習支援を開始してくれたことにはさらに驚かされた。行動力にあふれる宇都宮大学国際学部生たちは、それぞれ違った形で多文化共生についての実践的理解を深めていくことだろう。そうした一人一人の経験を共有し、発展させる場があればなおよいということも感じている。

3) ドイツの経験から

ドイツ連邦共和国では、1955年から73年にかけて、二国間協定に基づく外国人労働者の募集が行われた。オイルショック以降には帰国奨励策もとられたが奏功せず、むしろ家族の呼び寄せが拡大した。かれらの定住化という事実を

認めることを避け、1990年頃には旧共産圏からのドイツ系帰還者やユーゴスラビアからの難民等が大量に流入してもなお「ドイツは移民受入国ではない」との認識を示してきたドイツ政治の大きな転換点となったのは、2000年9月の「移住委員会」発足であり、その後は「移民の統合」を積極的に推進している。このようなドイツの経験から、事実と認識の乖離、社会的合意形成の困難といった現実を感じ取ってもらうことがねらいであった。その意図がどの程度伝わっているかはわからないが、比較という切り口から日本社会を見る機会は提供できたのではないだろうか。

補足として

以上の講義の後、全体講義の際に、多文化共生を批判するのはよいが、では多文化共生をどのように捉えていくべきなのかと問われた。時間が限られていて言葉足らずではあったが、人権や民主主義のように「理念」として追求されていくのがよいと考えていると述べた。人権という概念が、「女性の権利」「子どもの権利」「少数者の権利」などの検討を通してその意味するところを豊かにしてきたように、そして、人権とは何かを説明することは難しくても「それは人権侵害だ」といった判断は日常的になされているように、種々の具体的検討を通して多文化共生の内容が豊かになり、多文化共生という語で表される方向性の共有や修正が日常的に行われることが望ましいのではないかというのが私なりの回答であった。

授業受講者による感想

内山涼香

この多文化共生概論の授業は、国際学部の教員がそれぞれの研究分野から考える多文化共生をテーマにしたものであった。多文化共生のさまざまな形と各分野の問題点を学び、それらは複雑に絡み合い、互いに影響を与えているのだとわかった。私は、今後いろいろな分野で出会うであろう「多文化共生」という問題に対するアプローチは多様であると感じた。また、すべての授業に教員の個性が出ていて、とても有意義な時間であった。そのなかでも特に印象に残った授業2つについて以下に述べる。

1つ目は、田巻松雄先生による「共生に向き合うための問題意識」という授業で、強者と弱者の共生をテーマに行われた。私は田巻先生の「弱者を考えることは強者を考えること」という言葉が強く印象に残っている。今まであまり意識することはなかったが、自分の生活が不自由なく当たり前のように送れていることが、強者である何よりの証ということに私は気付いた。しかし、常に強者であるわけではない。ときには弱者の立場に立つこともある。そこから見る景色は、強者の立場から見たものとは全く異なるものである。大切なのは、自分は強者であるか、弱者であるかに気付き、そのうえで何ができるか、何が必要かを考えることだと思う。田巻先生は授業にて、ホームレスが抱える問題を取り上げていた。私はこれをきっかけに、ホームレス問題に関心を持ち、深く学びたいと感じた。そして、夏に行われた国際キャリア教育での学びにつなげた。私は幸い、希望していた田巻先生の分科会に参加できた。そこでは同様に弱者との共生をテーマにし、ホームレス問題と外国人児童生徒の進学問題についての講義が行われた。この合宿で、とても貴重な体験をした。

2つ目は、高山道代先生による「共生に向き合うための自文化理解」という授業だ。国際学部である私たちが、多文化共生について考える際は、どうしても意識が外に向きがちである。しかし、高山先生は、他文化を理解するためには、まず自分を知ることが大切だと述べた。私はこの考えを支持したい。以前、浅草寺に訪れた際、私は日本人より外国人のほうが多い光景を見て、衝撃を受けた。彼らはいたるところで写真を撮り、丁寧に参拝をしていた。日本文化を良く思い、楽しんでもらっていることは、一人の日本人として嬉しく感じた。しかしその反面、日本人である私は彼らよりも日本文化を大事に思っていない、知ろうとしていないことに気付き、少し恥ずかしく悲しい気持ちになった。この経験から、当たり前のように目の前にある風景にも日本文化を見出し、それらを大切に後世に伝えていきたいと強く感じた。私は授業を通して、日本文化に目を向ける重要性に気付くことができた。

実を言うと、大学に入学する前は文化系の分野にしか興味がなかった。しかし、最近は社会系の分野にも関心を持つようになった。この変化は、多文化共生概論の授業がもたらしたものだ。国際学部の文化学科と社会学科の枠組みがなくなったことで、この授業でも文化と社会、関係なく受講することができた。これは、この授業のひとつの魅力であると思う。私は今もなお、どちらの分野を専攻するか決めきれていない。今後、関心を持った分野の知識をどんどん得て、自分の世界を広げていきたい。

高崎達也

私は多文化共生概論から、有意義で満足度が高い講義であったという印象を受けた。以下にこの講義の特徴を踏まえつつ、その理由を述べたい。

まず一つは、国際学部のコアである「共生」

について様々な視点から考えることができた点である。この講義は1年前期の前半に受講する全8回の授業で、授業の担当教員が毎回変わる形式だ。その中で教育、社会学、環境問題、国際協力など、それぞれの担当教員の専門から見た「共生」についての講義を聞く。これによって私たちは、そもそも共生とは何か、国際学部で学ぶべきことは何か、などこれからの大学で学ぶことの基盤を作ることが出来ると感じた。実際に、この講義では様々な国際問題や課題について触れ、1年生に必要な広い教養を身につけることが出来た。その中で私は、「多文化共生」とはただ「異文化を有する人たちとも仲良くしましょう」というだけではない、と考えた。確かに、異文化理解を進めてお互いの思想の違いを認め合うことは大切だ。しかしそれだけではなく、貧困の人たちや難民・移民など、自分とは背景を異にする社会の弱者との「共生」も私たちには必要であると学んだ。

次に、この講義はゼミや授業選びの参考にもなる点が良いと感じた。私たちがゼミに参加するのは三年次からだが、それまでに国際学部の教員全ての講義を経験することはかなり難しい。その上、ほとんどの学生は自分の関心のある講義に偏ってしまうため、関心が薄いテーマの講義にも進んで参加する学生は少ないだろう。そのため多文化共生概論のような講義は、様々な教員の考えに触れることで自らの見識を広げ、自分の関心を閉ざすことなく、新しい関心へのきっかけをつくることが出来ると感じた。実際に私も新しく関心が芽生えた分野があるため、それらはこれからの時間割作成の一助となるだろう。

最後に、この講義の終わりに各々の教員に質問や意見を出来る時間が設けられている点が良いと感じた。グループ毎に話し合い、そこで出た質問に対して各々の教員が返答するという形式は、講義の内容を再確認することができ、質

問が浮かびやすかった。また、この時間では教員も多くいるため、生徒だけではなく教員も交えたアクティブラーニングであるように感じられた。一つの講義に複数の教員がいることはほとんどないが、今回経験したことでそのメリットを感じる事が出来たため、このような形式の講義が他にもあると面白いのではないかと考えた。

以上の理由により、私は多文化共生概論を有意義な講義であったと考える。この講義は全8回の授業で6人の教員の講義を聞くことが出来るが、全15回の授業にしてより多くの教員の講義を聞くことが出来れば、さらに有意義なものになると感じた。それによって自分の視野を広げ、様々なことに関心を持つことが、私たちの大学での学びをより一層有意義なものにすることにつながるだろう。この講義で学んだことをただ認識するだけでなく、日々の講義の中でしっかりと考えていきたい。

AMALIA HUSNA BINTI ABDUL AZIS

前期開講した「多文化共生概論」の授業を通して、様々な視点から多文化共生の考え方を学んだ。毎回の授業では違う教員から「多文化」や「共生」に関連した事例や問題が紹介されて、物事に対する視点が変わったと思う。その上、先生方の専門や研究について聞いたり『世界を見るための38講』を読んだりして、自分が専攻したい分野が少しずつ見えてきた。この授業でいくつかの印象に残ったことは以下に述べられている。

一つは、「共生」と「共存」の意味の違いである。「共存」は複数の文化的共同体がお互いに不干渉する意味である。ちなみに、「共生」は他者との社会的共存を意味している。つまりお互いへの「尊重」、「平等」を含め、ともに生きることである。世の中には多文化が共存している社会が多いが、共生しない場合が少なく

ないと思う。その結果、偏見や差別から紛争まで様々な問題が起こっている。例えば、アメリカでの人種差別の問題だ。アメリカは経済的や政治的にはだいぶ進んでいると言われているが、今まで黒人と白人の差別問題が残っている。彼らはしっかりと共生していないから、アメリカ人の黒人は長年社会的や法律的に不公平に扱われている。他者のことを尊重しあったら、偏見や差別の問題が解決できると思う。

二つは、他者のことや文化を理解する前に、自文化を理解することが必要である。多文化共生を行うために、お互いの文化を理解したり尊重し合ったりすることが最も重要なことである。しかし、その前に自分の文化に対して外部者としてみつめ、客観的な理解が必要だと思う。そうすると、他者の文化を尊重しながら自分のアイデンティティーを確保することができる。正直に言うと、私自身も日本に来てから自分の国や文化に対する理解がもっと深まってきた気がした。それは日本人や他の留学生からマレーシアについて聞かれたら、自分が答えられるために調べておいたからだ。その上、自分の文化を尊重すると、他者の文化に対してもそのような気持ちになりやすいと思う。

三つは、共生は異なる文化を持っている人の間だけではないことである。前は「多文化共生」のフレーズを聞くと違う国や民族のイメージしか思い浮かべなかった。この授業では、様々なアクターの事例が紹介されて、非常に興味深かった。例えばホームレスのような社会的な弱者との共生である。多くの人々はホームレスが自分より下だと思い、社会の一部には受け入れないと気がする。私も前は同じで、路上や公園で寝ているホームレスは人生を諦めた周りの人々に迷惑をかける人々だと思った。我々が彼らのような人々の現状を理解しないから、共生できないと思う。彼らが社会の一部に受け入れられなければ、ホームレス問題のような社会

的な問題が解決できないと思う。

四つは、遠くに生きていて自分には関係がなさそうな人々は世の中にはいないことである。現在の世界はだんだんグローバル化しているからだ。授業で紹介された事例はスリランカでの紅茶プランテーションの労働者である。授業の前半はプランテーションでの労働者の問題を聞いて、彼らの苦しさを共感したが、自分が何もできないと思った。しかし、先生によると、我々が消費者として彼らを助けることができるそうだ。それを聞くと、我々がグローバル化している世界には貿易などを通して共生していると思う。だから、何かの行動をとったり発言をしたりする際には自分だけでなく他人にも影響を与えるということを考えなければいけない。

最後に、この授業を通して様々なことを別の見方で改めて考えさせられた。グローバル化する世界の現状を「多文化共生」の視点から見えてきて、この授業を毎回楽しんで受講してきた。

鈴木アリサ

「多文化共生概論」の授業を聞きながら「共生」という言葉の意味について深く考えさせられました。各先生方がそれぞれの専門、研究分野から「共生」について或いはそれに関連した講義をしてくださいましたが、一番に「共生」という言葉は対象によって当てはまる場所が変わる概念であるということを感じました。例えば、グローバル社会を対象とした「共生」、社会的弱者を対象とした「共生」など、それぞれの視点によって様々な「共生」について考えられます。また、対象が同じ「共生」だとしても人によってその定義が異なる場合もあります。つまり、「共生」という言葉は「これ」といえる答えは出せないものであると感じました。

ある先生が、この授業において、「共生」の前に考えるべきことはまず「相手」であると

おっしゃいました。つまり、対象はいろいろあるものの、共生を考える上で、「自分又は私たち」と「相手」がいる場合、「相手」を知ることが最初だということです。しかし、私はこの言葉を聞いたとき、本当にそうなのだろうか、と疑問に思いました。もちろん相手を知ることが必須条件だと思いますが、一番初めのスタート地点は「自分」なのではないだろうかとは私に考えました。多くの先生方は知識や自身の考え方を明確に持っていらっしゃるため、相手を知ることが最優先に位置付けられると思うのですが、学生である私たちはまず自分の興味・関心分野などに基づいて、知識や考え方を蓄積していくことから始めるという過程が最初であり、不可欠だと思ったからです。相手を知ることが一番大切なことですが、知識のまだ浅い私たち学生が証拠に基づかない勝手なことをいかにもすべて知ったかのように並べ立てるのは、大学からは通用しません。しかし逆に言うと、まずその証拠となる情報集めを、知識を、多角的な考え方を学ぶために、学びによって「自分」という人間を少しずつ築いていくために大学に通っているといえると思います。そうはいっても大学での学びはすべてではありませんし、先生方のおっしゃることを100パーセント鵜呑みにはできません。これは決して信用していないから、などといった話ではなく、国際学部国際学科の学生なら一度は必ず聞いたことがあるはずの「Critical Thinking」の観点から、何事も自分なりの考え方を持つことが大切であるということです。

「多文化共生概論」の授業を聞いてもう一つ考えたことがあります。ここでいう「多文化」についてです。国際学部国際学科だからといって、当然国際的な視点からの専門科目が多いものの、国際の問題だけ（日本の外だけ）を見ている、考えているわけではないということです。例えば、スリランカと日本の「紅茶を通し

たつながり」について、「日本語」という言語について、日本の「ホームレス」について、日本に在住する「外国人児童生徒」について、など日本にもたくさん「共生」の対象があります。そういう意味でも国際学部が扱える問題、対象はとて範囲の広いものだと感じました。つまり、国際学部自体が「多文化」的な学部であるといえるでしょう。

宇都宮大学国際学部国際学科に入学して、今まで一年間と、そしてこれから卒業するまで今なお研究・調査、プロジェクトなどの活動を続けられていらっしゃる先生方の様々な観点からの知識や考え方を教わり、学んでいくわけですが、私にとっての、私が考える「共生」とは何か、そしてその考える上での対象についてこれからは勉強して考え続けていきたいと思っています。

高堂則仁

深夜、たった一匹の蚊の羽音で眠りが妨げられてしまう時がある。又、たった数ミリの棘が足の裏に刺さっただけでも、スムーズな歩行が困難になってしまう時がある。私はこの様な時、人間の身体は如何にか弱く、同時にその精神も頼りない存在であるか思い知らされる。その一方で私達人類は、政治・経済に於ける社会制度の構築、文化の展開、又は宇宙空間に人工衛星を飛ばしたり、遺伝子を操作する等の科学技術の進展を得て、その探究心と知識の集積によって自然を捉え、より良い社会の実現に努めて来た。

学問を行う上で留意すべき点は、人間のこのような能力が、先の「か弱さ」の上に存在している「危うさ」を忘れてはならない事であると思う。有史以来、領土や資源の獲得、宗教や民族に起因する争い等、私達を取り囲む世界では自然的要因と社会的要因が混交する事で、事態の解決を遠ざけてしまっている事例が多々あ

る。その動機は私達の経済活動が主な誘因ではないかと考えられる。その時叫ばれるスローガンは余りに単純で、結局己の「か弱さ」から目を背ける為に、他者を攻撃するだけの言動に帰結する。この時人々は、世界を断片的・離散的な現象として扱って居り、その背後にある文脈は無視される。その短絡的な思考に自己を逃避させてしまえば、反省の余地は放棄され、争いが後を絶たない悲劇を齎すのだ。換言すれば、単純な思考は、世界をそのまま単純に扱ってしまう。

今年度より社会系と文化系に分かれていた学科が一つになり、開講されたオムニバス形式の『多文化共生概論』では、多文化共生の視点を身に付ける為の考え方、分野融合的研究に関する導入科目として紹介された。この科目に於いて、多文化共生に関わる問題の切り出し方が、扱う事象の結論を大きく左右する事を知った。それは日々の生活の中で、自分が意識していなかった風景や製品が、他国や他者の犠牲の上に成立っている、若しくはその逆である事に気付けば、それは解決されるべき問題として私達の意識上に概念化されるからだ。その上で、哲学のない学問は、気の抜けた炭酸水のようなもので、事象と精神的な展開が結び付かない事を田口卓臣先生の講義で実感した。そして既存の社会制度から切り捨てられた者が、私達の世界の本質を語っていると思わせた田巻松雄先生の講義では、共感の源泉はやはり私達の「か弱さ」にあり、他者との関係に於いても基本単位になると再認識した。それが集団内・集団間の関係になると、個々の精神力学が規格化されて思わぬ方向へ動き出す。高橋若菜先生の取組んでいる環境問題はその代名詞で、東日本大震災時の福島第一原子力発電所の事故に於ける放射性物質の拡散、高度経済成長期の勢いに任せた植樹による花粉症の蔓延等は、経済効果に忘我した後世への無責任な結末である。その日常の経済

活動の常識を疑う意識を与えて下さったのは、栗原俊輔先生の講義であった。

私は以前、美術制作を専門としてワークショップに携わった事があるが、各参加者の文化的背景を尊重する謙虚さが、その地域のコミュニティを円滑にする布石になると信じるようになった。それは小さな国際交流のイベントからでも見出せた。その上で自文化理解は国際交流の通底として、更に新鮮な発見を齎す面白さを高山道代先生の講義で知り、立花有希先生が解説して下さったHANDSプロジェクトの様な活動を通して、既存の日本人コミュニティが、外国籍の人々への親和性を具備する算段として大いに参考になった。まだ斯界に無知な自分ではあるが、複眼的な視座で問題を意識化する心構えを『多文化共生概論』で学ばせて頂いた。そして私の念頭に定着したのは、「私達の生は共に危うく、だからこそ共生しなければ先は無い」という危機感の啓蒙である。

金城あいみ

私にとってこの多文化共生概論の講義は、新しい教員と未知なる学問との出会いの場でした。私を含め、多くの学生が自分の専門にしたい分野について迷いながらこの講義を受けたと思いますが、それぞれの分野に対する固定概念やステレオタイプを打破するいい機会になったのではないかと思います。

入学したての1年生の前期に履修したこの講義は、国際学部の教員らの著書である『世界を見るための38項』（以下では38項と略します）をもとにして進められていきました。授業と同時に、私の受講していた新生セミナーでもこの本を題材にしたディスカッションを行っていたので、38講を読み、議論したうえでそれでも理解できない疑問などを抱きながら、多文化共生概論の講義を楽しみにしていました。

講義の内容としては、欧米文化研究、国際強

制研究、国際協力研究、日本文化社会研究、国際共生研究などの様々な視点から「国際」についてアプローチしたものでした。国際社会研究と一言で言っても、社会の底辺にいるホームレスという存在に着目して研究したり、国際協力といっても、ごみや公害などの環境について着目したり、またはフェアトレードに着目したりと、学問の多様さに驚かされました。また、以前まであまり興味がなかった、世界全体ではなく数か国に絞ってその国の文化について研究していくことや、一番身近な日本の文化や言語について学ぶことの魅力を知ることができました。高校とは全く違うかたちの「学び」に触れることができ、新鮮な気持ちを抱いたのと同時に、社会に直接関係していく学問を学ぶことの喜びをとっても感じました。これらの講義を通してわかったことは、全ての学問がどこかで必ず影響しあっていて、一つの分野を極めるだけでなく他の分野の知識にも精通しておかなければならないということです。どの分野も、同じ

世界にあるもの、起きていることを扱っており、学問の名称は違えど同じ「国際」を異なる角度から研究しているため、その根底にあるものはすべて同じなのだと思えることができました。

入学直後に、他学部の学生に国際学部は何を勉強しているのかわからないという旨の疑問を投げかけられました。その時私はなんと答えていいかわからず、その場しのぎの返事をしました。しかし現在は、国際学部とは学生の数だけ学問があるような多様な学部であり、そこでは学生一人一人がそれぞれの考える「国際」について学んでいるため、その内容は「国際」と一言で表せるほど容易ではないと考えています。多文化共生概論を受講して以降、この限られた4年間という大学生活のうちに、自分と世界を繋いでくれる一生の課題となる学問に出会えるよう日々努力することができています。